

1/16相

第5波の自宅死202人

厚労省調査 防げたケースも

新型コロナウイルスに感染して自宅で亡くなった人が、昨年8～9月の「第5波」で少なくとも202人に上ることが、厚生労働省の調査でわかった。過半数の55%が50代以下。「死」を防ぎえたケースもあった。

調査は昨年12月、都道府県を通じて自治体に実施し、厚労省が13日の専門家組織の会合で結果を公表した。202人中132人は自宅療養中に亡くなり、70人（35%）は自宅で亡くなつた後に感染が確認された。

男性が139人（69%）を占める。年代別では20代

酸素飽和度が下がった中等症は3%、人工呼吸器が必要な重症は2%だった。

自治体からは亡くなつた人の具体的な状況も報告された。目立つのは、保健所などが担う健康観察が適切にできなかつた問題だ。

一方、保健所が入院や宿泊療養を勧めても自宅療養を希望したり、自ら実施した抗原検査で陽性とわかつても保健所に連絡しなかつたりするなど、本人の判断が影響したとみられるケースもあった。

第5波に蔓延したデルタ株は、比較的若い人でも肺炎が起きやすく、発表日で見た死者数は8～9月

れた▼生前に陽性が判明していたが、医療機関から届け出がなく健康観察がされなかつた。

東京都の集計によると、昨年8月末まで70歳以上は85%が2回目接種を終え、高齢者の多くがワクチ

ンの効果に守られていた。一方、若い世代にはワクチンが行き届いておらず、50代でも2回接種を終えたのは4割ほどだった。

（阿部彰芳）